

イタリア・オペラにおけるヴェリズモとその教育的効果

—レオンカヴァッロのオペラ《道化師》を中心に—

諏訪 才子*

Verismo in Italian opera and the educational effects:
Centering on “*I Pagliacci*” of Leoncavallo

Saiko SUWA*

Key words : レオンカヴァッロ, ルッジェーロ Leoncavallo, Ruggiero
ヴェリズモ Verismo
道化師 I Pagliacci
イタリア・オペラ Italian opera
音楽教育 music education

1. はじめに

19世紀のイタリアは、まさにオペラの黄金時代といえよう。それは、ロッシーニ (Rossini, Gioacchino 1792-1868) に始まり、ベッリーニ (Bellini, Vincenzo 1801-1835)、ドニゼッティ (Donizetti, Gaetano 1797-1848) の活躍を経てヴェルディ (Verdi, Giuseppe 1813-1901) において頂点に達した。世紀末になるとマスカーニ (Mascagni, Pietro 1863-1945) やレオンカヴァッロ (Leoncavallo, Ruggiero 1857-1919) らによるヴェリズモ・オペラがあらわれ、更に、プッチーニ (Puccini, Giacomo 1858-1924) の大衆的なオペラへと受け継がれていく。オペラの物語は、内容が多彩になり、貴族の物語だけではなく屋根裏に住む庶民が描かれたり、英雄ではなく恋に悩む若者が主人公になったりする。こうした変化は、マスカーニ作曲の《カヴァレリア・ルスティカーナ (1890)》とレオンカヴァッロ作曲による《道化師 (1892)》のセンセーショナルな成功がきっかけとなって始まった。これが、オペラにおける写実主義 (ヴェリズモ) の誕生である。

本稿では、市井の人々が生きた証となるような真実のドラマ、ヴェリズモに焦点を当てて、19

世紀後半から20世紀前半におけるイタリア・オペラの概観を捉えることが目的である。ヴェリズモは一般庶民の暮らしに基づいた物語なのである。また、ヴェリズモ・オペラが生まれた背景を探ることで、当時のイタリアにおけるオペラを取り巻く環境をも知りえよう。特に、ヴェリズモ・オペラで最も成功をおさめたといっても過言ではないレオンカヴァッロの《道化師》に着目して、ヴェリズモ・オペラに関して言及する。

また筆者は、本学児童学科において音楽表現 (声楽) の授業を担当している。音楽を専門としていない本学の学生にとって、オペラを聴く機会は少ないといえる。しかし、教員を目指す多くの学生は、将来、様々な形で実際に音楽を教えなければならない。そのため、歌と演技と音楽が結合されたオペラを鑑賞することは、学生にとっても多くの利点があり、自己の音楽性を高めるとともに、児童や園児を教え導くための手立てをも身に付けておくことができる。

そこで、筆者は授業の一環として、今年度の前期の講義においてプッチーニ作曲のオペラ《蝶々夫人》のDVD鑑賞を行った。本科目は、小学校及び幼稚園教諭一種免許状取得のための必修、また保育士資格取得のための選択科目であり、児童学科2年生52名全員が受講している。《蝶々夫人》

* 東北女子大学

は、設定となる舞台が明治初期の日本(長崎)であり、日本人の苗字を名乗る登場人物が多く登場すること、また童謡や民謡のメロディーもふんだんに盛り込まれていること、そしてオペラの内容が劇的でありながらも分かりやすいため、学生にとって身近で親しみの持てる鑑賞教材として選択した。また、鑑賞したDVDはイタリア、アレナ・ディ・ヴェローナにおけるライブ収録である。全幕2時間20分程の作品であるが、実際の鑑賞は前奏曲と第一幕、そして第2幕及び第3幕は、内容の解説を加えながら「ある晴れた日に」、「花の二重唱」「さらば愛の家よ」等の主要曲を選択し、最後は「お前、お前、いとしい坊や」と蝶々夫人の自害の場で完結させた。

鑑賞後に、受講生52名対象として実施したアンケート調査の結果は、次の通りである。[今回の鑑賞以前から、オペラがどのようなものであるか知っていた]と答えたのは11名(21%)、[少し知っていた]が39名(75%)、[全く知らなかった]が2名(4%)であった。また、大学入学以前にオペラを鑑賞したことがある学生は23名(44%)で、過半数29名(56%)の学生は、オペラを鑑賞した経験がなかった。実際の演奏を聴いたことがあるのは、3名のみで、他は、小学校・中学校・高等学校での音楽の授業内におけるDVD鑑賞が大多数で、回数は1~2回であった。今回、オペラDVDを鑑賞した感想としては、[今後、抜粋部分のみではなく、全幕を通して観たいと思った]が15名(29%)、[他のオペラも鑑賞したいと思った]が45名(87%)、[今後、実際の演奏を聴きたいと思った]が19名(37%)、更に、[オペラの中のアリアや重唱を演奏してみたい]と答えた学生も2名(4%)いた。過半数の学生が、オペラをDVDでさえ鑑賞した経験がないという実態であるが、今回の鑑賞は、学生にとってオペラを楽しみ、また、大変、興味や関心を持つきっかけとなったといえる。オペラは、音楽(独唱・重唱・管弦楽)、演劇、文学(台本等)、美術(舞台装置、衣装)、舞踊など、様々な要素が融合した総合舞台芸術である。オペラは、1600年頃、イタリア・

フィレンツェで発祥したが、芸術的文化の相違を認識し理解を深めることは、グローバル化の進む現代において、互いに文化的交流を深めながら向上し合う精神を生むと考える。更に、オペラ鑑賞は、視覚、聴覚を通してその中に観客を巻き込んでいく。観客(学生)もその中に巻き込まれていき、演奏者と観客の間で、また、観客(学生)同志が音楽の感動を共有できる。また、鑑賞の前には、その演目の歴史的背景や作曲家、特徴等、概観を捉え、理解することにより、より一層、感動を深めることができるのである。鑑賞は、オペラの中の有名なアリア等、1~2曲の楽曲に絞って行うことも可能であるが、全幕を通して観ることにより、そのアリアが歌われる状況や心情を、より理解し、その中に引き込まれていく楽しみもある。

感情表現をストレートに出したヴェリズモは、オペラ初心者にも、ストーリーが非常に分かりやすいといえる。更に《道化師》は1時間余りのオペラであるため、授業の中でカットすることなく、1つの作品として全幕を通して鑑賞することができる。鑑賞教材として、更にはアリア等の歌唱教材としても発展させ、活用することができる。可能であるならば、実際に劇場で一期一会の感動的な演奏を肌で感じながら味わってほしいところであるが、DVDによる鑑賞は、特に口の開け方や表情等、細部に渡り、よく観察することができるという利点もある。学生には、他の文化の歴史、風土、言語等に対する知識や理解を深めて、幅広い音楽観を持ちながら、生涯に渡って様々な音楽に触れ、楽しみ、感動し、豊かな情操を養ってほしい。そして、また、その知識、技能や音楽の喜びを、教育の場で、子どもたちに還元してほしいのである。本論では、前述したようなヴェリズモの音楽的特徴と教育的な観点からも、学生にとってレオンカヴァッロの《道化師》は有用な教材であると考え、このオペラを中心に論述を進めていきたい。

2. 19世紀後半から20世紀前半におけるイタリア・オペラ

統一国家となった1861年からヴェルディ作曲の《オテロ(1887)》が初演される1887年までのイタリアには、彼に匹敵するオペラの巨匠が存在しなかったと言っても過言ではないだろう。特にヴェルディの晩年のオペラ《オテロ》と《ファルスタッフ(1893)》は、19世紀イタリア・オペラにおける最後の金字塔である。だが、時代の移り変わりとともに若き作曲家たちにとって、ヴェルディは、もはや過去の遺物と化し、あまり重要視されなくなっていくのである。彼らは、イタリア生粋の作曲家ではない、ドイツ出身のヴァーグナーの作品に新たな未来を見出し、大きな影響を受けることになる。

ヴェルディ以外の重要な作曲家として挙げられるのは、ボーイト(Boit, Arrigo 1842-1918)、カタラーニ(Catalani, Alfredo 1854-1893)の二人であると考えられる。《ラ・ジョコンダ(1876)》、《オテロ》、《ファルスタッフ》の台本作家でもあるアッリゴ・ボーイトは、パドヴァに生まれ、ミラノ王立音楽院を卒業後パリに遊学してヴェルディに出会い、帰国後ミラノでスカピリアトゥーラ運動の詩人・評論家として活躍した。スカピリアトゥーラとは、髪型や身なりを構わず自由奔放な生き方を実践し、保守的文化を批判した若い芸術家の一派を指している。批評家としてのボーイトはヴァーグナー(Wagner, Richard 1813-1883)を積極的に紹介し、これが原因で一時ヴェルディと仲たがいをしていたとされる。ボーイト作曲による、ゲーテ(Goethe, Johann Wolfgang von 1749-1832)の『ファウスト』を原作とするオペラ《メフィストフェレ(1868)》は、初演こそ失敗したものの改訂が加えられ、1881年のミラノ・スカラ座では決定的評価を得た。この作品は作曲者みずからが台本を書いてスカラ座で初演された最初のオペラでもある。そのため、ボーイトについては、作曲家としてよりも、ヴェルディとの関わりや台本作家としての業績に目を向けるべきである。

アルフレード・カタラーニはルッカ¹に生まれ

地元のパチーニ音楽院で学び、パリ留学を経てミラノ王立音楽院でアントーニオ・バッツィーニ(Bazzini, Antonio 1818-1897)に師事したとされる。音楽院時代に作曲した《鎌(1875)》で認められたが、デビュー作《エルダ(1880)》は失敗に終わる。四作目の《エドメーア(1886)》が好評を得て、ミラノ王立音楽院の作曲家の教授として迎え入れられる。しかし、次作の《ワリー(1892)》を最後に39歳の若さで病死してしまう。カタラーニは、ボーイトとも親交を結んでおり、スカピリアトゥーラ運動に賛同したために、ヴァーグナー主義者として批判されてきた。だが、カタラーニが作曲した《ワリー》が、あまりにも詩情に富んだ作品であったため、カタラーニのもつ、その抒情的で美しい音楽は後世にまで受け継がれることとなり、今では一定の評価を得ている。

3. イタリア・オペラにおける世紀末

19世紀のイタリアにも、フランスのベル・エポックに照応する文化が花を咲かせ、新たな潮流が生まれる。その一つは民族主義が排他的な方向に向かう内向きの志向、言わばイタリア至上主義であり、イタリア人作曲家によるオペラ作品の受容である。内に向かう傾向は、ドイツにおいても同様であり、20世紀に入るとファシズムを生み出すことになる。しかし、外国に対する競争心とは別に、フランスやドイツの文化を積極的に摂取しようとする外向きの志向もまた、世紀末のイタリアには芽生えていた。つまり、一方ではイタリア至上主義を唱えつつも、ドイツ出身の作曲家であるヴァーグナー受容が次第に高まっていき、実際にはイタリア国内においても受け入れざるを得ない状況になっていたのである。イタリアにおける本格的なヴァーグナー受容は1871年の《ローエングリン(1871)》のイタリア初演に始まり、ミラノ・スカラ座においても1888年から1894年までの間に、毎年ヴァーグナーの作品を上演していたほどである。しかし、オペラ王国としてのプライドとイタリアの民族的伝統を保つために、上演はすべてイタリア語で行われていた。一方、ヴェル

ディは、イタリア・オペラのレパートリーにおいて、大きな柱となる人物の一人である。彼はシェイクスピア (Shakespeare, William 1564-1616) を模範としており、人生においても思想においても、表現においても手本としていた。そして、半世紀に渡り作品を書き続けており、また、その半世紀の間には政治的にも社会的にも文化的にも大きな変化が起きていたため、彼の作品も複雑な様相を呈している。具体例をあげると、初期のオペラ作品から《ドン・カルロ (1867)》までは、イタリアのオペラの伝統にのっとった手法で作曲していたが、ヴェルディ自身もヴァーグナーの影響を受け、《アイダ (1871)》と《オテロ (1887)》ではヴァーグナーの管弦楽法を取り入れて作曲している。ヴァーグナーの作曲技法を取り入れながらも、一方ではイタリア全土へとヴァーグナーが台頭をしていくことに危惧したヴェルディは、晩年「過去に帰ろう、それが進歩とならん²」(過去に帰ることが進歩につながる) という思想を持つようになったと考えられている。彼は、ルネサンス後期に活躍した作曲家であるパレストリーナ (Palestrina, Giovanni Pierluigi da 1525-1594) にまで遡るイタリアの伝統的な音楽書法に基づいて作曲することを望んでいたようである。しかしながら、スカピリアトゥーラに共感する若き作曲家には届かず、その結果ヴェリズモ (真実主義) と呼ばれる新しい潮流が生み出されることとなる。

4. ヴェリズモ時代の幕開け

本項では、ヴェリズモを文学的特徴と音楽的特徴の2つに分け、それぞれについて説明を行う。

(1) ヴェリズモの文学的特徴

ヴェリズモ (verismo [伊]) 「真実主義」は、19世紀末から20世紀初頭にかけてエミール・ゾラ (Zola, Émile François 1840-1902)、ギュスターヴ・フローベル (Flaubert, Gustave 1821-1880)、ヘンリック・イブセン (Ibsen, Henrik Johan 1828-1906)、オノレ・ド・バルザック (Balzac, Honoré de 1799-1850) やプロスペル・メリメ (Mérimée, Prosper 1803-1870) など、ヨーロッパ

文学の自然主義や写実主義の影響を受けて、イタリアで派生した文学の新様式である (この新様式は、後に音楽にも波及していく)。この中心的役割を果たしたのが、作家ジョヴァンニ・ヴェルガ (Verga, Giovanni 1840-1922) である。1880年以降のミラノを中心にスカピリアトゥーラと呼ばれた文学者の集団が、ロマン主義に対するアンチテーゼとして標榜したヴェリズモ運動に呼応したことに始まり、この潮流をオペラに取り込んだのが、作曲家のマスカーニやレオンカヴァッロである。ヴェルガの短編集『田舎の生活 (1880)』の中に含まれる『カヴァレリア・ルスティカーナ』(田舎の騎士道) は、後にマスカーニのオペラ『カヴァレリア・ルスティカーナ』の原作にもなり、このオペラの大成功によりヴェリズモ・オペラが誕生する。レオンカヴァッロの《道化師》と合わせて、この二作が、ヴェリズモ、即ちリアリズムの古典的名作となる。ヴェリズモは、それ以前の、神話や古代の英雄、歴史を題材とした文学作品を台本に用いたロマン主義とは異なり、一般的な自然主義の傾向、つまり下層階級や貧困層の人々を登場させ、地方色が強く表出したものである。そして、日常生活における、現実的な出来事を写実的にとらえ、特に、むき出しの激しい感情に突き動かされた暴力、憎悪、犯罪、情痴など、抑制のきかない行動が悲劇的な結末をもたらす過程が、生々しく描写されるという特徴を持つ。

(2) ヴェリズモの音楽的特徴

ヴェリズモにおける音楽の特徴は、従来のベル・カント・オペラが持っていた装飾性を排除し、言葉の力とアクセントが一層の激しさを求め、歌手が歌うソロの旋律は起伏が激しく、より直接的に感情を表現するものである。コロラトゥーラのアリアなど声楽上の技巧は失われ、ヴァーグナーよりも更に民族的な色彩を放つレチタティーヴォが用いられた。管弦楽も歌唱と同様に、アクセントのついた、より強い表現が必要とされた。ソロの激しい感情表現の旋律に合わせ、ドラマティックかつ重厚なハーモニーが付けられている。通

常、オペラの上演時間は3時間を越える作品が多い中、《カヴァレリア・ルスティカーナ》と《道化師》はいずれも一時間余りの一幕ものの作品である。この短い時間に、センセーショナルなドラマと音楽が凝縮されているのである。今日では、この二作品が同時に上演されることも多い。ヴェリズモの典型的な作品であるマスカーニの《カヴァレリア・ルスティカーナ》とレオンカヴァッロの《道化師》から、本稿では、レオンカヴァッロの《道化師》を題材に言及する。

5. レオンカヴァッロの生涯

(1) オペラ《道化師》に至るまでと作曲の経緯

ルッジェーロ・レオンカヴァッロは、裁判所判事の父と画家・彫刻家の娘である母との間に生まれた。幼少時からピアノを習い、1866年にわずか9才でナポリのサン・ピエートロ・ア・マイエツラ音楽院に入学し、ラウロ・ロッシに作曲を師事する。1876年には卒業ディプロマを得る。その後オペラ作家を志し、ボローニャ大学にてイタリア・ルネサンスの文学、韻律学について、詩人ジョスエ・カルドゥッチの講義を受け、1878年には文学学士号を取得する。在学中から《ヴィニーの悲劇 Alfred de Vigny》《チャタートン Chatterton》のオペラ化に取りかかり、台本・作曲ともに完成させるが、興行師に資金を持ち逃げされ上演には至らなかった。借財を負った彼は、カフェ・ピアニストとしてフランス、イギリス、ヨーロッパ全域、更には叔父が外交官を務めるエジプトにまで旅をし、そこで約2年間、演奏活動を行う。しかし、トルコの属国であったエジプトとイギリスとの間に勃発した戦争のためヨーロッパに退去することになる。その後、6年間、パリで再びカフェ・ピアニストや音楽教師、オペラ練習ピアニスト、歌手の依頼による歌曲の作曲などをして生計を立てた。ボローニャにおいて、レオンカヴァッロは、リヒャルト・ヴァーグナーの影響を大きく受けている。ヴァーグナーはロマン主義思想により、オペラを総合芸術作品として、音楽と台本の融合を唱えた。彼の《ニーベルングの指輪

(4部作)》に感銘を受けたレオンカヴァッロは、台本の自作と、その作曲を決意する。まずは、先に挙げた《チャタートン》、次にパリ時代には、フィレンツェのルネサンス期における歴史オペラ・三部作《黄昏 Crepusculum》の作成を計画して、第一部の《メディチ家の人々 I Medici》の台本を完成させている。そして、この台本に、レオンカヴァッロの可能性を見いだした、バリトン歌手ヴィクトール・モレル (Maurel, Victor 1848-1923) との出会いにより、彼の放浪生活には終止符が打たれる。モレルは楽譜出版社であるリコルディ社にレオンカヴァッロを紹介し、リコルディ社は《チャタートン》と《メディチ家の人々》の台本売買権を獲得している。その後、彼はリコルディ社との間で《メディチ家の人々》の作曲契約を結び、スコアを書き終える。しかし、ヴェルディの後を継ぐ作曲家がブッチーニであると考えたりコルディ社はこれを出版・上演せず、ついに堪忍袋の緒が切れたレオンカヴァッロは、リコルディ社との関係を断つ決心をする。そこで彼は、当時、ピエトロ・マスカーニが、ヴェリズモ・オペラの先駆けとなる《カヴァレリア・ルスティカーナ》で大成功を収めていたことに触発され、自らも、ヴェリズモによるオペラ《道化師》の台本とスコアを、わずか5ヶ月間で書き上げた。そして、これをリコルディ社のライバルであるソニーニョ社に持ち込んだところ、社主であるエドアルドに評価され、即座に上演の運びとなる。

(2) オペラ《道化師》の初演と世界的成功

《道化師》の初演は、《カヴァレリア・ルスティカーナ》の初演から2年後の1892年5月21日に、ミラノのダル・ヴェルメ劇場で、若き25歳のアウトウーロ・トスカニーニの指揮で幕を開ける。トニオ役は、ヴェルディのオペラ《オテロ》のイアーゴ役を初演で歌い、さらにヴェルディ作曲のオペラ《ファルスタッフ》のファルスタッフ役も初演で歌った名バリトン歌手のヴィクトール・モレルを起用した。また、カニオ役には前年12月にローエン格林役を歌ってデビューした21歳のフィ

オレッロ・ジラウド (Giraud, Fiorella 1870-1928)、ネッダ役には《ファルスタッフ》の初演においてナンネッタ役を歌ったアデリーナ・シュテーレ (Stehle, Adeline 1860-1945) を起用した。当時、人気絶頂にあったモレルのために、題名は主人公のカニオを表したイタリア語の単数形《パリアッチョ Pagliaccio》から、トニオも含めた複数形《パリアッチ Pagliacci》に変更され、更にトニオが歌う有名な前口上 (プロローグ) が追加された。《道化師》は、もともと一幕物のオペラとして作曲され、初演も一幕と告知されていたが、長くなったために、急遽、全二幕のオペラとして上演されることとなった。レオンカヴァッロは、新たに前口上 (プロローグ) を作曲し間奏曲も加えて、一幕のオペラを二幕に編成し直し、初版楽譜も二幕のオペラ作品として出版された。初演は圧倒的な成功を得て、当時ほとんど無名だったレオンカヴァッロは一夜にして、マスカーニと並ぶ名声を手に入れたのである。その後、1892年12月に、ドイツ後による上演がベルリンで、1893年4月に、ロシア語によりモスクワで、また1893年5月には、ロンドンのコヴェント・ガーデン王立劇場 Royal Opera House Covent Garden でソプラノ歌手、ネリー・メルバ (Melba, Nelli 1861-1931) をネッダ役に迎えて上演された。そして、初演から10年後の1902年12月、パリ・オペラ座で、テノール歌手ド・レジク (De Reszké) のカニオ役により上演された。この作品は、スペイン語、ポーランド語、デンマーク語、スウェーデン語、ルーマニア語、ブルガリア語、リトアニア語、ヘブライ語等にも翻訳され、その成功は世界的なものになる。《道化師》は《カヴァレリア・ルスティカーナ》と共に、今日まで上演され続けるヴェリズモ・オペラの最高傑作となったのである。

6. レオンカヴァッロと音楽出版社ソンゾーニョ社との関わり

ソンゾーニョ社は、18世紀末にジョバン・バッティスタ・ソンゾーニョによってミラノに設立された、初めのうちは、様々な分野の出版を単発的

に行っていた会社である。その会社は、ジョバン・バッティスタの息子であるフランチェスコとロレンツォに受け継がれた。さらに、1861年にはロレンツォの息子であるエドアルド (1836-1920) に受け継がれ、彼によって1874年から楽譜出版を専門とする出版社になった。1883年になるとエドアルドはソンゾーニョ・コンクールと称するオペラの作曲コンクールを主催するようになった。コンクールを主催した背景として、19世紀前半には、作曲家は、劇場支配人の依頼により作曲し劇場と契約を結んでいたが、19世紀後半になると、楽譜出版社と契約を結ぶようになっていたという事実がある。ソンゾーニョ社よりも歴史の古いリコルディ社は、既にヴェルディと組んで、オペラの世界を動かす存在になっていた。つまり、18世紀も後半になると、オペラ界を動かすプロデューサー的存在は、劇場支配人から楽譜出版社の手に移っていったのである。そのためリコルディ社やソンゾーニョ社は、楽譜を出版するだけでなく、有力な作曲家、あるいは若手の有望そうな作曲家の、たまごを抱え込むようになる。特に、新進のソンゾーニョ社はオペラの作曲コンクールを主催して、若手のオペラ作曲家を積極的にリクルートしていたのである。また、リコルディ社もソンゾーニョ社も、プロデューサーとして、オペラの原作を何にするかの相談にのり、原作の著作権処理も担当していた。

1833年に行われた第1回ソンゾーニョ・コンクールを皮切りに、1889年に開催された第2回ソンゾーニョ・コンクールで、マスカーニが《カヴァレリア・ルスティカーナ》で第1位を得た。コンクールは1892年と1903年にも行われ、レオンカヴァッロの《道化師》は1892年の応募作品として書かれていたのだが、このコンクールは一幕物を対象にしていたのに、二幕になっていたため受理されなかった。しかし、先述したように当時人気のあったバリトン歌手、ヴィクトール・モレルの口利きもあり、ソンゾーニョ社社長のエドアルド・ソンゾーニョの目にとまったとされる。さらに、ソンゾーニョ社の仕事上のパートナーであるミラノ

のダル・ヴェルメ劇場の支配人、カルロ・スペルティの尽力により、レオンカヴァッロの《道化師》は初演される運びとなり、ソンゾーニョ社から楽譜が出版されることにもなったのである。こうしてソンゾーニョ社は当時のイタリアにおけるヴェリズモ・オペラの隆盛に一役かったわけである。

7. オペラ《道化師》

レオンカヴァッロ作曲のオペラ《道化師》は、前口上(プロローグ)と二幕からなるオペラである。台本は作曲者であるレオンカヴァッロ自身によってイタリア語で書かれ、1821年に、ミラノ・ダル・ヴェルメ劇場で初演された。以下に、オペラのあらすじを簡潔に述べる。

旅回りの道化師一座の座長であるカニオは、妻のネッダが村の青年と駆け落ちしようとしているのに気づく。一方、ネッダに恋心を抱くトニオは、ネッダに告白するが拒まれてしまう。トニオはその仕返しに、ネッダの浮気相手を夫のカニオに知らせる。そして、芝居³の上演中にカニオは、演じている道化師の役が現在の自分の立場に酷似しているため、だんだんと芝居と現実の区別がつかなくなり、ついには嫉妬心からネッダを舞台上で殺害してしまう、という内容である。

レオンカヴァッロの《道化師》が、他の同時代のオペラと違って、オペラの幕が開く前に口上を言うという点である。この前口上(プロローグ)のシーンでは、道化であるトニオを通じて、レオンカヴァッロが自らの道化における美的見地を知らしめていると考えられている。体の不自由なトニオにとって、旅から旅への人生における拠り所は、座長であるカニオが娶った年若い妻のネッダである。ネッダに恋心を抱きつつも、後に彼女に、その気持ちを打ち明けると冷たくあしらわれ、ネッダへの復讐心に燃える男となる。そして、ついには一方が一方を殺すしかないという救いようのない現実へと発展していくことにな

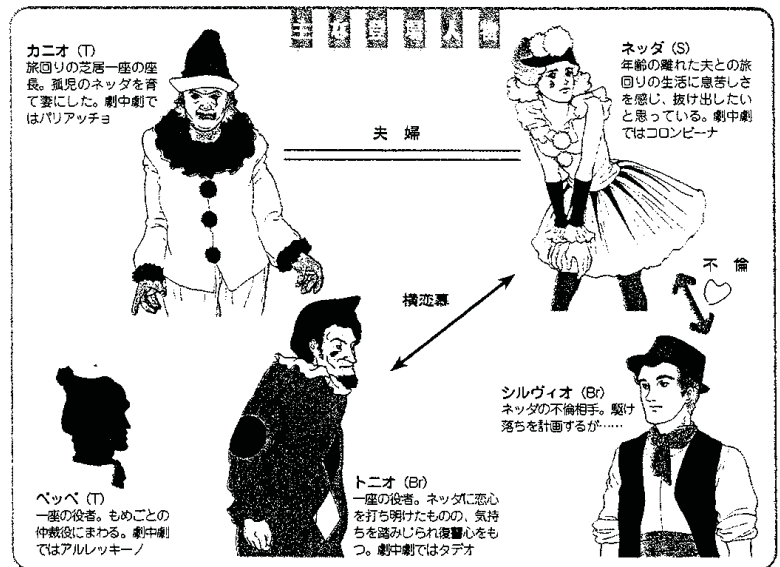


図1 江森一夫編 (2008)『オペラの楽しみ方完全ガイド』池田書店, p.103

る。この行き場のない気持ちは、道化師に扮したトニオが「道化の衣装を着けた役者も人間です。喜びも悲しみも、感じることは普通の人々と何ら変わることはないのです」と自己紹介しながら、これから始まる芝居について熱っぽく語る口上の中に込められ、その後オペラの幕が上がる。この口上は、座長のカニオではなく体の不自由なトニオに語らせることで、トニオの強い性格を印象付けるのに効果的な場面でもある。

ここで道化師における登場人物について、図1で簡潔に説明しておきたい。道化師一座の座長がカニオ(テノール)で、ネッダの夫でもある。カニオは劇中で、主役の道化師(パリアッチョ)を演じている。カニオの妻がネッダ(ソプラノ)で、劇中ではコロムビーナと名乗っている。ネッダには恋人がおり、それがシルヴィオ(バリトン)である。シルヴィオは一座のメンバーではないが、一座が旅回りで巡業をしている間にネッダと親密な関係になったと思われる。さらに一座のメンバーである体の不自由なトニオ(バリトン)は、劇中ではタデオと名乗りネッダに片思いをしているが、ネッダからは冷たくあしらわれている。その他に、ペッペ(テノール)という役者もおり、彼は劇中ではアルレッキーノという名で登場している。

8. オペラ《道化師》の楽曲分析

オペラ《道化師》を、より深く掘り下げて研究を行うために、オペラの中での主要曲の楽曲分析を行い、《道化師》の Dover 版(1994)のスコアをもとに、適宜、譜例を用いながら説明する。筆者が、オペラ《道化師》の中で重要だと考える部分は三つある。まず第一にオペラを構成する上で重要な音楽の動機がある序奏である。この序奏から前口上へと巧みに繋がり、トニオの前口上が始まることになる。次に、オペラ《道化師》の中で、重要な鍵を握るネッダの Aria を取り上げる。ネッダの Aria 〈大空に晴れやかに〉は鳥の歌として知られ、変化に富んだバラード風の Aria である。最後に取り上げるのは、一座の座長でもあるカニオが歌う Aria 〈衣装をつけろ〉である。この Aria は、妻であるネッダの不貞に気づきながらも、道化師を演じなければならない自らの運命を嘆いた慟哭の歌である。以下に、この三つの部分について分析し、言及する。

①序奏～前口上(プロローグ)

まず初めに、曲想はテンポの速い Vivace で始まり、開幕に先立ち管弦楽の序奏部分とトニオが歌う前口上が演奏される。この序奏の出だしの部分は、2小節からなる2つの動機によって構成されている。最初の2小節の動機は、符点の付いた力強く鋭いリズムが、金管楽器群と弦楽器群によって奏でられる(譜例1)。引き続き次の2小節の動機では、木管楽器群がテンポよく音階を駆け上がっていくような旋律を奏でることで、聴衆は一気にオペラの世界へと引き込まれる(譜例2)。(譜例1)と(譜例2)は、オペラの中で度々表れる動機でもある。(譜例1)は、カニオが、孤児の頃から引き取って育ててきた愛しい妻を殺さなければならないという恐ろしい宿命を表すとされ、(譜例2)は、カニオから逃れようとするネッダの心情を表すものと考えられる。

符点リズムが多用された序奏部分が落ち着きを見せると、曲想が Vivace から Largo に変わり、ゆったりとした流れへと変化していく。すると、ホルンにより道化師に扮したカニオの悲哀を表した〈笑えパリアッチョ〉の旋律が演奏される(譜例3)。その次に、ハープの伴奏でヴァイオリンの旋律によるネッダとネッダの浮気の相手であるシ

(譜例 1・2)

ルヴィオの〈愛の動機〉(譜例4)が表れる。更には、〈愛の動機〉が終わるやいなや、チェロにカニオの〈嫉妬の動機〉(譜例5)が表れる。オペラの劇中ではこの〈嫉妬の動機〉の2音目と3音目

が三度音程になることが多い。

その後、道化姿のトニオが登場し「ごめん下さい、皆さま方」と挨拶し、「役者も人間であり、この芝居も空涙ではなく、役者の心をご覧あれ」

The image shows a page of a musical score. The top section is marked '4' and 'Largo assai' with a tempo of 44. It includes parts for Fag (Flute), Corni (Horns), Arpe (Arpeggio), Violi I & II (Violins), Violoncelli (Violas), and C.B. (Cello/Double Bass). The Fag part is annotated with '(譜例 3) ben cantato con dolore' and 'stentato stentato'. The Arpe part has '3° e 4°' written below it. The bottom section is marked '5' and 'Cantabile assai sostenuto' with a tempo of 54. It includes parts for Fag, Clarinet, Tru (Trumpet), B. T. (Bass Trombone), Arpe, Violi I & II, Violoncelli, and C.B. The Fag part is marked 'TUTTI' and 'rit.'. The Clarinet part has 'pp'. The Tru part has 'ppp'. The Arpe part has 'p'. The Violi I & II parts have 'animando angustoso' and 'rit.'. The Violoncelli part has 'ARCO' and '(譜例 5) misterioso'. The C.B. part has 'ARCO'. There are also some 'p' and 'pp' markings in the bottom section.

(譜例 3・4・5)

と、前口上を述べる。この前口上はレチタティーヴォ風の語り口からアリア風の旋律までの変化に富んだ書法が用いられ、管弦楽による動機や旋律が効果的に用いられることで、歌詞の内容をよく表していると考えられる。トニオは、劇中での前口上が、古い芝居である仮面劇のしきたりに乗っ取ったやり方であると述べている。トニオは「ある日、作者の記憶の根底にあった一つの事件が、彼の心を震わせたのです(譜例6)。作者は涙を流し、ため息をつきながらこれを書いたのです。この舞台では、本物の人間が愛し合い、憎しみ合う姿をご覧頂けるでしょう」と聴衆に話しかける。曲想は *Andante cantabile* に変わり(譜例7)、「私どものだぶだぶの道化師の衣装ではなく、魂を考えて頂きたいのです。私どもも骨と肉からできた人間でございますし、皆さまと同じ空気を吸っております故…、さあ芝居の始まりです！」と述べ幕の後ろへと下がる。これから始まる激情的な内容を暗示するかのような、意味深い前口上となっている。

②ネッダのアリア〈大空に晴れやかに〉(鳥の歌)

第一幕で歌われるネッダのアリアである。カニオという夫がいながら、若いシルヴィオと浮気をしているネッダは、カニオが浮気を気づいているのかもしれないという不安な気持ちを抱えている。しかし、周りを見渡すと太陽が輝き小鳥が鳴

いている。アルパ(譜例8)やフルート(譜例9)が明るく響き、鳥の声を表現している。ネッダは幼い頃に母が歌ってくれた歌を思い出し、鳥の声を真似ながら〈大空に晴れやかに〉を歌う(譜例10)。

カニオは、孤児だったネッダの父親代わりとなり、彼女を育て一人前の役者にしたが、いつしか自分の妻にしてしまった人物である。ネッダは父親ほども年齢の離れた夫に飽き飽きし、外の世界への強い憧れを抱いている。カニオは夫であるとともに保護者でもある。保護という名の束縛や嫉妬も強く、ネッダは鬱積した日々を送っていると考えられる。一座では、体の不自由なトニオがネッダに恋心を抱いているが、密かに、過去においてはトニオとも恋の相手をしたことがあったのかもしれない。しかし、そこに若く情熱的なシルヴィオという青年が表れる。シルヴィオは外の世界へと通じるドアの鍵を持っている。ネッダはシルヴィオとの暮らしを夢見て、このアリアを歌っているのであろう。このアリアは8分の3拍子の華やかな旋律で、「まだ見ぬ土地を目指して翼の限り飛んでいきたい」と軽快に歌われる。新国立劇場での〈道化師〉公演で、2004年にネッダ役を演じたジュリエット・ガルスティンは次のように語っている「…ネッダは好きなところに飛んでいく鳥が羨ましいんです。私はこのアリアで彼女の孤独を理解しました。彼女には自由への強い憧れがあるのです…⁴」

TONIO



TONIO



(譜例6・7)

39 BALLATELLA
Vivace. ♩ = 66.

Ott. (譜例 9)

Fl.

Ob.

Clar.

Fag.

Corni.

Arpa I. *bisbigliando* (譜例 8) *sempre ppp* *poco rinf.* *dim.*

Arpa II. *pp sfiorando le corde* *poco rinf.* *dim.*

NEDDA. Vivace. ♩ = 66.

2 Viol. I. *pp e legato sempre*

2 Viol. II.

Viol. I.

Viol. II.

Viole. *leggero e carassovole*

Celli.

CB.

39

(譜例 8・9)

NEDDA. (譜例 10)

a tempo giusto senza mai affrett.

Stri - do - no las - su li - be - ra - men - te ...

(譜例 10)

③カニオのアリア〈衣装をつけろ〉

カニオが第一幕の終盤で歌うアリアである。カニオは、妻であるネッダの不貞を目撃してしまうことになる。しかし、今、同じような筋書きの道化芝居を演じ、客を笑わせなければならない道化師としての自分に悶え苦しんでいる。道化師としての自分を自嘲しながらも、Adagio 4分の2拍子で、〈衣装をつけろ〉の悲痛なアリアを歌う(譜例11)。「衣装をつけろ。顔に白粉を塗れ。悶えも涙も道化に変えろ。すすり泣きも、おどけ顔に変えろ。」と涙をこらえつつカニオは歌うが、歌い終わると泣き崩れ、後奏とともに力なく小屋へと向かう。後奏では管楽器のイングリッシュホルンとクラリネットが(譜例11)の〈衣装をつけろ〉の旋律を演奏し、弦楽器ではヴェイオリンとチェロが同じように〈衣装をつけろ〉の旋律をなぞっている。旋律を幾重にも重ねることで、より深くカニオの悲しみを表現しているかのように思われる。この〈衣装をつけろ〉のアリアは、テノールが歌う名曲としてもよく知られており、カニオの悲しみだけではなくドラマティックさも要求される激情的なアリアである。

カニオはネッダのことが妻としても娘としても可愛くて仕方がない。カニオがネッダを保護した幼い頃は、ネッダにとって親代わりの頼もしい存在であったに違いない。しかし、いつしかネッダを妻として迎え夫婦となった今は、その年の差が引け目となっている。若く美しい妻であるネッダにはシルヴィオという若い恋人がおり、浮気の現場もすでに目撃してしまっている。カニオの嫉妬心は、ネッダを激しく愛するあまり、どうしようもないところまで燃え上がっていたのである。道化師として舞台に立つ彼が、まるで人生における

道化役のようなものと自嘲する姿は、聴衆の涙を大いにそそるものであるといえよう。まさに、ヴェリズモ音楽の神髄を表現しているかのようなアリアである。

9. おわりに

本稿では、イタリア・オペラにおけるヴェリズモとその教育的効果というタイトルのもと、レオンカヴァッロのオペラ《道化師》を中心に、これまで述べてきた。まず最初に、本研究を行うきっかけとなった19世紀後半から20世紀前半におけるイタリア・オペラの概観、及び学生にアンケート調査を行い、オペラがどのような教育的効果をもたらすのか、ということについて簡潔に述べた。次に、イタリア・オペラの世紀末と題して、同時代に活躍した作曲家の業績とヴェリズモが生まれた時代背景について論じてきた。さらにヴェリズモ時代の幕開けと称して、自然主義や文学を通じて生み出されたヴェリズモが、音楽にも影響を与えたことや、ヴェリズモ・オペラの原作にもなったヴェルガの短編小説についても触れた。ヴェリズモ・オペラは前世紀のオペラとどのように違うのか、具体的に筆者の意見を含めて論述してきた。そして、本稿の中心となるレオンカヴァッロの生涯について論じ、《道化師》の初演に至るまでの経緯とイタリア国内に留まらず、世界的に大成功を収めた《道化師》初演について言及した。この後、レオンカヴァッロとは重要な関係を持ち、レオンカヴァッロの《道化師》を成功へと導いた立役者でもある、楽譜出版社のソニーニョ社との関わりについても詳しく述べている。さらには、レオンカヴァッロのオペラ《道化師》のあらすじを登場人物の説明を交えて分かりやすく解説した。なお、オペラ《道化師》では作品をさらに深く掘り下げて追求すべく楽曲分析を行った。楽曲分析をした箇所は、《道化師》の中で重要だと考える三つの部分(①序奏～前口上(プロローグ)、②ネッダのアリア〈大空に晴れやかに〉(鳥の歌)、③カニオのアリア〈衣装をつけろ〉)である。この三つに的を絞って、適宜、譜例を用い

CANTO , Arioso Adagio. $\text{♩} = 48$.

(譜例 11) (declamando con dolore)

Ve - sti la giub - ba, e la - fac - cia infa - ri - na

(譜例 11)

ながら楽曲分析を行い、オペラを構成していく動機や旋律の特徴等についても言及した。それと同時に、登場人物の心情を考え、筆者なりの考察も行ってきた。

本稿のもう一つの柱である教育的効果についても言及したい。本稿の冒頭において述べたように、音楽表現の授業においてプッチーニ作曲のオペラ《蝶々夫人》のDVDを学生に観せ、事後アンケートを行った結果、学生からは、「また観たい」、「アリアを歌ってみたい」等の意見が上がり、好評価が得られた。鑑賞後の記述式感想には、次のようなものが挙げられる。

「《蝶々夫人》というオペラタイトルは知っていたが、内容は分からなかった。日本が舞台の作品ということで、舞台セットや衣装の細部に渡り、日本が感じられた。着物は腹部を締めつけるため、歌うのが大変であると感じた。途中、日本の名曲〈さくら〉が流れ、感動した。」

「音の高さや声の大きさに合わせて、口の開き具合や形を変化させ、特に高音を歌うときには、口を縦にとっても大きく開けていた。私も、今後、もっと口を大きく開けたいと思う。」

「歌手たちの堂々とした歌唱に惹き付けられた。皆、喉の奥まで見える位に口を大きく開けていた。私も、もっと口を開け、歌手たちのように芯があり、どこまでも響く声で、伸び伸び声を出せるようになりたいと思った。」

「歌手を支えているオーケストラも素晴らしかった。感情や動作を効果的に表現していて、オーケストラの重要性を知る良い機会となった。」

「場面によって、表情や声の大きさや出し方が変化していて、表現力に驚いた。歌う時は、やはり、その感情や内容に合わせた表情を出すことが必要だとわかった。私も、曲に対するイメージを持ちながら歌いたいと思った。オペラを観るのは初めてだったが、舞台構成も華やかで、実際に生

で観ると、もっと迫力があるだろうと感じた。もっと他の作品も観たい。」

「《蝶々夫人》の作品名は、以前から知っていたのでこの機会を楽しみにしていた。想像とは違い、悲しい物語で、日本人である蝶々さんが、はかなげで、自害する前に子供と抱き合う場面は本当に悲しかった。普段観ることのできないオペラを、今回鑑賞することができ、貴重な経験になった。」

今回受講した52名のうち過半数の学生が、これまでオペラを鑑賞した経験がなかった。しかし、以上の感想から、舞台芸術オペラを音楽(歌唱・管弦楽)、演劇、文学等、あらゆる角度から総合的に感得し、感動とともに十分楽しみ、また、この先のオペラに対する興味や関心を高めることに繋がったと考えられる。《蝶々夫人》を作曲したプッチーニと《道化師》を作曲したレオンカヴァッロは、ほぼ同時代に生き、ともにヴェリズモの影響を受け、ヴェリズモに関連したオペラ作品を残している。《蝶々夫人》はヴェリズモそのものとは言い難いが、明治に生きた女性の一つの生き方を表現しており、見る人の心を揺さぶる臨場感に溢れた作品である。今後、声楽の授業では、本研究を基に、《道化師》を全幕を通して鑑賞するとともに歌唱教材としても発展させ、更に、様々なオペラ演目を積極的に取り入れ、活用していきたい。

注

- 1 プッチーニもカタラーニと同じルッカの生まれである。
- 2 水谷彰良 (2015) 『新イタリア・オペラ史』音楽之友社, p.239.
- 3 劇中劇として古くから知られているコメディ・デラルテという道化芝居の形式を巧みに取り入れ、それを現実と交錯させることで劇中効果を一層高めている。
- 4 公益財団法人新国立劇場運営財団 (2012) 『新国立

劇場 名作オペラ 50 鑑賞入門』世界文化社, p.94-95.

引用・参考文献

(1) 単行本

- ・ヴァン, ジル (2005) 『イタリア・オペラ』 森立子訳, 白水社.
- ・江森一夫編 (2008) 『オペラの楽しみ方完全ガイド』 池田書店, p.102-103.
- ・D.J.グラウト (1958) 『オペラ史 (下)』 服部幸三訳, 音楽之友社, p.517-518, p.645-659.
- ・公益財団法人新国立劇場運営財団 (2012) 『新国立劇場 名作オペラ 50 鑑賞入門』 世界文化社, p.94-95.
- ・小瀬村幸子訳 (2015) 『オペラ対訳ライブラリー マスカーニ カヴァレリア・ルスティカーナ/レオンカヴァッロ 道化師』 音楽之友社, P.125-126.
- ・佐川吉男 (2005) 『名作オペラ上演史』 株式会社芸術現代社.
- ・チャンパイ, アッティラ/ホラント, ディートマル (1989) 『名作オペラボックス 27 マスカーニ カヴァレリア・ルスティカーナ/レオンカヴァッロ 道化師』 宮崎滋他訳, 音楽之友社, p.112-117, p.122-124.
- ・辻昌宏 (2014) 『明治大学リバティブックス オペラは脚本から』 明治大学出版会.
- ・ペティット, スティーヴン (2010) 『オペラの世界』 佐久間康夫訳, 開文社出版株式会社.
- ・堀内修監修 (2011) 『CDでわかる オペラの名曲&名場面集』 ナツメ社.
- ・水谷彰良 (2015) 『新イタリア・オペラ史』 音楽之友社, p.235-246.
- ・宮沢縦一他 (1994) 『最新名曲解説全集 歌劇Ⅱ』 第 19 巻, 音楽之友社, p.457-465.
- ・山口眞子他 (2004) 『オペラ・ギャラリー 50 登場人物&物語図解』 株式会社学習研究社.

(2) 事典項目

- ・アジャニ, ステファノ (1994) 「ソンゾーニョ」 『ニューグローヴ世界音楽大事典』 大崎滋生訳, 講談社, 第 10 巻, p.135.
- ・アッシュブロック, ウィリアム (1995) 「レオンカヴァッロ, ルッジェーロ」 『ニューグローヴ世界音楽大事典』 講談社, 第 20 巻, p.150-151.

- ・海老沢敏/上参郷祐康/西岡信雄/山口修監修 (2015) 『新編 音楽中辞典』 音楽之友社.
- ・セイディ, スタンリー/グラウト, ドナルド他 (1993) 「オペラ」 『ニューグローヴ世界音楽大事典』 吉田泰輔他訳, 講談社, 第 6 巻, p.475-548.
- ・肥塚れい子 (1993) 「ヴェリズモ」 『ニューグローヴ世界音楽大事典』 講談社, 第 2 巻, p.528-529.

(3) 公演パンフレット

- ・公益財団法人東京二期会編 (2012) 『二期会創立 60 周年記念公演 東京二期会オペラ劇場カヴァレリア・ルスティカーナ/パリアッチ(道化師)』 公益財団法人東京二期会.
- ・財団法人東京オペラ振興会編 (1990) 『藤原歌劇団カヴァレリア・ルスティカーナ/道化師』 財団法人東京オペラ振興会.
- ・新国立劇場運営財団営業部編 (2004) 『マスカーニ カヴァレリア・ルスティカーナ/レオンカヴァッロ 道化師』 財団法人新国立劇場運営財団.
- ・新国立劇場運営財団営業部編 (2014) 『ピエトロ・マスカーニ カヴァレリア・ルスティカーナ/ルッジェーロ・レオンカヴァッロの道化師』 公益財団法人新国立劇場運営財団.

(4) 楽譜

- ・Leoncavallo, Ruggiero. PAGLIACCI Dover 1994.
- ・Leoncavallo, Ruggiero. PAGLIACCI Casa Musicale Sonzogno 2009.

(5) DVD

- ・Leoncavallo, Ruggiero (2009) 〈1981 オリジナル録画〉 『Mascagni Cavalleria rusuticana / Leoncavallo Pagliacci』 プレートル, ジョルジュ指揮 ミラノ・スカラ座管弦楽団, ミラノ・スカラ座合唱団, UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ.
- ・Leoncavallo, Ruggiero (2009) 『チューリッヒ歌劇場ライブ収録 マスカーニ歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」/レオンカヴァッロ歌劇「道化師」』 ランツァーニ, ステファノ指揮 チューリッヒ歌劇場管弦楽団&合唱団, ARTHAUSMUSIK.